

平成 2 1 年度

「ヒトツナギの旅」モニターツアー

活動報告書



平成 2 2 年 3 月 3 1 日
隠岐島前高等学校魅力化推進協議会

1. ヒトツナギの背景

島根県隠岐郡島前地域は、後鳥羽上皇や後醍醐天皇などが島流しされた事で有名な島々です。島根半島から北東に約60km、日本海沖の隠岐諸島南西部にある西ノ島（西ノ島町）、中ノ島（海士町）、知夫里島（知夫村）の三島を島前と呼びます。

島前地域に唯一ある高校、隠岐島前高等学校は、全校生徒91人です。少子化でこのまま生徒が減ると隠岐島前高校は存続できなくなってしまいます。そこで、今回のツアーを通して、全国の中高生にこの島と島前高校の魅力を感じてもらい、私たちの高校に入学し一緒に学ぶ仲間を募ります。

また、全国に自分らしく生きられず殻に閉じこもろうとする中高生がいます。この「島」とのつながりを通して、今を苦しむ中高生を元気にしていきます。

そして、島前地域で生まれ育った中高生には、島の良さが分からない人も多くいます。島外からの中高生に自分たちの島を紹介することで、この地域の魅力を再発見し、自分達の島を胸を張って人に語れるようになります。

2. 事業の進め方

まずは、旅の企画・運営を行う「高校生スタッフ」「地域スタッフ」を募集し、プランの基礎を作ります。旅の運営は、隠岐島高等学校魅力化協議会、隠岐島前高等学校の教職員スタッフ、高校生が中心となって行います。高校生スタッフの活動は、基本的には平日の火曜日・木曜日の放課後（試験一週間前を除く）と春休み期間に、図書館を中心に行います。また、必要に応じて、島前地域をフィールドワークし、地域の人と話したり、体験活動を行います。

次に旅を実際に行い、最後に旅の写真や日記、料理のレシピなどをまとめた本を参加者にプレゼントします。この本を見て旅を振り返ることで、島前を思い出してもらい、も一度旅に参加する切っ掛けづくり、「旅を続ける仕掛け」を行います。

3. 事業実施までの経過

(1) スタッフの募集

高校生スタッフの募集

隠岐島前高等学校では、11月に1、2年生の生徒に向けて、観光甲子園に出場し、今後も活動したいと考えている生徒たちが、ポスターをつくったり、朝礼で呼びかけたり、また昼休みに説明会を開催するなどして、企画運営を行うスタッフを募集しました。

高校生スタッフの決定

1年生 4名（女子2名、男子2名、西ノ島2名、海士2名）

2年生 4名（女子2名、男子1名、海士3名） 合計 8名

地域スタッフの協力

隠岐島前高等学校魅力化推進委員を通じて地域スタッフを募集しました。

具体的には、料理、救護・緊急対応、ホームステイについて、それぞれ協力者となる方々に対し個別に説明を行い、スタッフとしての参加をお願いしました。

(3) 受け入れ体制づくり

目的づくり

高校生スタッフで話し合い、ヒトツナギの旅の目的を定めました。

目的

都会の人たちに島の魅力を知ってもらい、
島の人たちには島の魅力を再確認してもらう

旅のプログラムづくり

観光甲子園のプログラムシートを元に、旅のプログラムを再検討しました。

スケジュール 時期：春休み期間 日程：4泊5日

3月26日(金)	午後	境港集合 (フェリー) (西ノ島町)
	夜	出会のセレモニー(西ノ島・別府港) = 焼火神社社務所へ移動 = = オリエンテーション = 夕食 = 歓迎会 焼火神社社務所(泊)
3月27日(土)	午前	焼火神社をお参り = 指令「島前を感じよう!!」 = 昼ごはん
	午後	指令「島前を感じよう!!」
	夜	風呂 = 夕食 = 指令の報告会 焼火神社社務所(泊)
3月28日(日)	終日	島のくらし体験(ホームステイ)
3月29日(土)		ホストファミリーにお礼の作業
		郷土料理教室
		だんだんパーティー
3月30日(日)		お別れセレモニー = 菱浦港 境港着 = 境港解散

役割分担

仕事分担を行い、それぞれで企画書を作成し、実施しました。

全体（旅のプログラムの管理）

参加者募集・対応

料理（旅の間のメニューづくり、調理スタッフ探し、生産者探し）

旅のグッズ作成（Tシャツ、名札、しおり、横断幕、看板）

歓迎会（伝統芸能、レクリエーション）

指令（プログラムづくり）

ホームステイ（ホーステイ先の対応）

だんだんパーティー（プログラムづくり）

旅の記録冊子



参加者の募集・決定

島前地域中高生 10 名と、島前地域以外の中高生 10 名を募集しました。

【 募集の方法 】

- ・ 隠岐島前高等学校のホームページに掲載。
- ・ 海士中学校、西ノ島中学校、知夫中学校、隠岐島前高校にチラシを配布。
- ・ 知人に告知メールを配信。

< 最終参加者 >

島前地域 8 名（男子 4 名・女子 4 名、高校生 6 名・中学生 2 名）
島前以外の地域 10 名（男子 4 名・女子 6 名、高校生 9 名・中学生 1 名）

注 1) 島前地域参加者分には当日同行した高校生サポーター 5 名分を含まない。
注 2) モニターツアーは、高校生徒サポーターの協力により、期間中、島前地域 10 名対
島前以外の地域 10 名を確保し実施。

3. モニターツアーの実施

1日目 < 3月26日(金) >

9:50	出迎え者 菱浦港発	菱浦港
13:00	夕食づくり 会場準備・リハーサル	焼火神社
13:20	出迎え者 境港着	境港
13:30	島外参加者集合	
14:25	島外参加者境港発	フェリー
15:30	スタッフ移動	
16:30	受付開始	別府港
17:00	島内参加者 別府港集合	
17:15	島内参加者 別府港着	
17:20	出会いセレモニー	
18:00	焼火神社に登る	
18:30	焼火神社着 夕日見学 オリエンテーション 焼火神DVD鑑賞	焼火神社
19:15	夕食・片づけ	
	歓迎会準備	
20:00	歓芸会	
21:00	星を見に行く	
21:30	日記の説明 日記を書く	
22:00	就寝	
	コネクター・ミーティング	

出会いセレモニー

「ようこそ島前へ ござらした！」

そう書かれた大きな紙を数人がかりで掲げ、フェリー「しらしま」から降りてくるツアー参加者を出迎える島前高生たち。3月26日の17:00過ぎ、隠岐島前・西ノ島の別府港にて、この日から5日間をかけてそれぞれの物語を紡ぐことになる全員が初めて顔をあわせました。

島外からの参加者は、首都圏のほか松江市在住の生徒ら10名。一方、島前の地元参加者8名。そして、旅を主催・運営する島前高の高校生スタッフ5名。（注：高校生スタッフ8名のうち3名は、島内メンバーとして旅に参加したため、5名になっています。）

知り合いどうしの参加者も数名いたものの、大半は初対面で、隠岐へ来るのも初めての体験。普段暮らす都会とはあまりに違う環境の中で繰り広げられる冒険を目前に控え、期待と興奮で笑顔がこぼれます。片や地元参加者は、遠方からはるばるやってきた新しい友達に興味津々。ただ、「みんなと仲良くなれるかな...」、「この旅、本当にうまくいくのかな...」。そんな気持ちも隠せません。とびきりわくわくと一抹の不安を抱えて、彼らの「ヒトツナギ」はスタートしました。



出迎える島内の中高生たち



島内と島外の中高生が出会った。

焼火神社へ登る

別府港からバスで約15分、到着したのは海拔452mの焼火(たくひ)山の麓。夕闇が迫りくる中、大きな荷物を抱えて山登りが始まりました。目指すは焼火神社です。

焼火山の中腹にある焼火神社は、日本海の船人に海上安全の神と崇められる由緒ある社。何度か改修されていますが、社務所は江戸時代からの建物で雰囲気たっぷりです。ヒトツナギ参加者は最初の2日間、ここ焼火神社で寝食を共にすることになります。



時おり視界が開けると、そこには海に沈み行く夕日。思わず足が止まります。急傾斜に加え強風による倒木があったりと一筋縄ではいかない山道ですが、約30分後ようやく到着。すると社務所の前には解け残った雪が。

「寒い！！ 東京は春だったのに、冬に戻った気がする...」（島外参加者 女子）



雄大な、そして厳しい隠岐の自然に迎えられ、焼火でのヒトツナギ体験が幕を開けた。

オリエンテーション

まずは、火鉢で暖をとりながらのオリエンテーション。進行役は高校生スタッフの一人、全日程を通じて参加者を盛り上げ続けた男子生徒です。

5日間のプランの概要を説明し、「ようこそ！」と声をかけながら、ひとりひとりに旅のしおりを手渡します。これは参加者それぞれが自由に書き込み作成していく『日記』。発見や感動を思い思いに記録し、旅を通じて1冊の本を完成させるという仕掛けです。



出迎える島内の中高生たち

夕食

焼火神社の由来を説明するDVDを全員で観るなど一通りの説明を終えると、待ちに待った夕食。全員が囲炉裏のある大広間へ集合しました。みんなで一緒に食べる最初の食事は...、島前名物・さざえカレー！しかも特別にタコ入りです。前日に採ったワカメのサラダもあります。

「盛り付けは自分でお願いします！」との声に、そろそろと台所へ向かう参加者たち。そこで出迎えるのは、食事面で強かに支援をいただいた 島のお母さん たち。「いっぱい食べてね！」



「サザエをこんな風にして食べるの初めて！」

「ワカメがこりこりして美味しい！ ワカメってこんなだっけ...？」

寒さを忘れて笑顔でパクつく参加者たち。女の子も続々とおかわりをしました。

「島前って島が3つあるけん、ちっさい船で行き来するんよ」

「へえ～！」

「いつもこんなに寒いのか？ どうやってしのぐの？」

島前の暮らしにどんどん興味がわいてくる参加者たち。初めての美味に舌鼓を打ちながら、自然と会話も盛り上がりました。

歓芸会

20:30。初日のメインイベント『歓”芸”会』が始まりました。地元高校生らが、「民謡の国・隠岐へようこそ！」とばかり、自慢の伝統芸能で歓迎します。

登場したのは、島前高1年の佐々美咲さん。隠岐民謡の相撲取り節を、銭太鼓で見せます。



「すごい！うまい！」

「かっこいい〜！」

自然と拍手が沸き起こります。都会からの参加者には民謡自体が珍しいうえ、それを同世代の友達が堂々と披露しているとあって、驚きと感動は並々ならぬようです。

お次は海士町発祥の民謡・キンニャモニャ。みんな踊れるようになるため、地元っ子たちがみっちり指導を行いました。踊りに使うしゃもじの持ち方を教え、手取り足とり...



しゃもじを打ち鳴らすうち、音がだんだん揃ってきました。みんなの顔にも自然と笑顔が。5分もすると「あ〜できた〜」という声があがり始め、音楽にあわせて踊れるようになりました。

「この踊り、楽しい！！」

歓芸会を堪能した島外参加者たちは、芸達者な地元高校生たちを見るまなざしに尊敬の色が混じり始めた様子。でも負けていません。自己紹介の時間になると、都会の若者らしい大胆なパフォーマンス力を発揮しはじめました。

そしてヒトツナギの旅に臨む抱負として

「島前の良さをたくさん知って、新しい発見をしたい」（島外女子高校生）

「東京との違いをたっぷり知って帰りたい」（島外男子高校生）

「自分自身を見直せる旅にしたい」（島外女子高校生）

・・・などと宣言。

地元高校生たちも、

「みんなと仲良くなって、この旅を全員で成功させたい」（島内女子高校生）

「最後には島外の子が帰りたくないって思うような、そんな旅にしたい!」（島内女
高校生）

・・・と意気込みを語りました。

夜の団らん

個性的なプレゼント合戦を経て、すっかり打ち解けた夜更け。22時を過ぎる頃、参加者たちは自然と囲炉裏に集まってきました。待ち構えるのは 島の母、Kさん。乾燥させたお米を味醂で甘辛く味付けしてあげたお菓子「エンガラ」など、島ならではの珍しいおやつが好評を博しました。新しい友達のために特製ケーキを焼いてきたのは、島内参加の男子高校生がいました。お菓子づくりが趣味というだけあって、腕前はなかなかのもので、美味しいケーキはあっという間に売り切れてしまいました。

しばらくすると、炙りイカのいい匂いが…。イカの一晩干しを炙って食べる初めての味に、島外の参加者からは「やわらかくて美味しい！」の歓声が次々とあがります。コネクターの一人、上野彩華さんは、「あ～島の子でよかった～…」としみじみ。島前ではおなじみのイカも、新しくできた友達と囲炉裏を囲んで食べる味は格別のようなものでした。



エンガラを食べる島外高校生



イカの一晩干しを囲炉裏で焼いて食べました。



2日目 < 3月27日(土) >

6:00	朝食づくり開始	焼火神社
	お弁当づくり開始	公民館
6:00	起床	焼火神社
6:30	焼火神社へお参り・水汲み	
7:00	朝食・片付け	
8:00	指令のレクチャー	
8:30	焼火神社発	
9:00	別府港着、船で移動 お弁当の受け取り	
9:05	(指令の内容をわたす。)	
	指令の実行	
13:00	夕食づくり	
16:50	西ノ島へ戻る	
17:00	風呂	みつけ島荘
17:40	みつけ島荘発	
17:55	焼火神社へ登る	焼火神社
18:30	焼火神社着	
18:45	夕食・片づけ	
19:30	一日振り返りの会	
21:00	ホームステイの説明 日記	
22:00	就寝	
	コネクター・ミーティング	

焼火神社へ参拝

午前6時。身を切る寒さの中、焼火神社のお社へみんなで参拝をし、旅の無事を祈りました。お参りが済むと、バケツと柄杓で水汲み。焼火神社での湧水の貴重さを学びます。
「こんな少しづつしか湧かないの!？」
「30分かけてバケツ1杯。この水で昨日のカレーも作ってたんだよ」
「え～ そうなんだ...」



朝食

社務所へ戻るとお待ちかねの朝食。ツアー中の料理を担当しているのはコネクターの一人、近藤弘志くん。新鮮食材を気前よく提供してくれる地元の人たちの協力を得ながら、シンプルだけど島前らしい極上の朝餉を用意しました。メニューは、輝く白米と味噌汁、メザシ、ハバの醤油炒め、ジンバの和えもの、高菜や大根の漬物、なめみそ。



「タクアン以外はみんな初めて...!」と目を輝かせる参加者たち。
「えっ ジンバって海土と西ノ島だけでしか採れないの?!」(島内参加者 高校生男子)
「そうよぉ～! だから自信もってPRしなさい!」(島のお母さん)

「島の食べものって、何かスゴイかも。」

都会っ子の口からもれたこのつぶやきに、島っ子たちは嬉しそうな笑顔を浮かべていました。

指令

この日、「ヒトツナギ」のプログラムでも最大の特徴である 指令 が、参加者に下されました。グループに分かれて島前3島に散らばり、「島の人物マップを作る」・「島に伝わる怪談や民話を探す」・「アジ・メバル・ベラを島民と一緒に釣って食べる」などのテーマにチャレンジすることで、島ならではの冒険を楽しむという企画です。

昼食用に手渡されたのは、バクダンおにぎり。醤油に岩海苔をひたして包んだ隠岐名物のおにぎりは、西ノ島のお母さん達の手作りです。それを持って、課題エリアに向かいます。



海士町（中ノ島）に向かったのは、地元っ子を含めた6名のグループです。彼らの 指令 は、「海士に伝わる怪談や民話を聞き集めること」。玄関港でも有数の博識おじいさん・おばあさんにヒアリングして昔話についての情報収集を行いました。島の南部の崎地区では、島随一の語り部おじいさんに後鳥羽上皇にまつわるさまざまな逸話を教えてもらいました。



宇受賀で地元のおじいさんたちとお喋り。焼きたてのお手製おかきが美味



崎の三穂神社では、海士名物・滝中さんの名調子を堪能

夕食

各グループの指令をこなし初日よりさらにリラックスした雰囲気の中、夕食の時を迎えました。焼火神社での最後の晚餐、この夜も自慢の腕をふるったのは料理担当の近藤弘志くんです。メインの食材は丸子（マルゴ）を2尾も提供してくれました。

「今回のアラの吸い物、味付けはぜんぶ僕がやりました。美味しいと思うので、ぜひ食べてください！」（料理担当の高校生スタッフ）

全員が大拍手。マルゴの刺身と吸い物、煮しめ、アラメの煮付け、ポテトサラダなど全6品がズラリ並びました。ここで、なんとみんなの目の前で料理担当の高校生スタッフが、マルゴをさばく様子を実演。

「すごい！ カッコいいー！」と女子の黄色い声が飛び、一方男子からは「この島の人、みんなこんなことできん？東京来たらめっちゃモテるぜ...」（島外高校生男子）といったつぶやきも...



「お椀、めっちゃ美味しいよ！ おかわりするっ」（島外高校生女子）

島前の豊かな食を通じて、感動を共有できた瞬間でした。

歓芸会 パート2

大満足の晩餐会が終わり、参加者たちが大広間で寛いでいる頃。部屋ひとつ隔てたスタッフ控え室では、緊張の面持ちで天冠（てんがん）をつけている島内参加者女子の姿がありました。女性による神楽、巫女舞（みこまい）披露するための準備です。



実はこの巫女舞、初日の歓芸会で舞う予定でしたが、準備不足に端を発する音響トラブルのため仕方なく延期されたもの。あの時のショックと悔しさを胸に、今夜こそ気合いを込めた堂々とした舞いっぷりに、観客からは惜しみない拍手が贈られました。



指令の報告会

舞の鑑賞を終えると、昼間の指令実行について各班の発表会が始まりました。知夫里島を巡って「**人物マップを作る**」という指令を実行したのは、女性4人のグループ。初めて会う島民約20人にヒアリングした彼女たちからは、「知夫の好きなところを聞くと、自然や人柄と答える人が多かった。皆さん親切で嬉しかった」（島外女子高校生）、「島根は縁結びの地と言うとおり、ひとつひとつの出会いの重さを感じた。これを大切にしたい。（島外女子高校生）といった感想が。また島内女子高校生から「知夫を歩いたのは初めて。崎という苗字が多くて驚いた」との報告があるなど、地元っ子にとっても新たな発見があったようです。

その他の参加者からも、「コーヒー飲んでけて言ってくれる人が多かった」、「いきなり車に乗せてくれて助かった!」、「通りすがりなのに家の中に入れてくれる。東京じゃ、『知らない人についてってはいけません』が常識なのに…」など、島民の純粋な親切心と温かみを肌で感じたという声が多く聞かれました。

「**アジやメバルを町民と一緒に釣って食べる!**」という難題を抱えて西ノ島に渡ったグループは、指令通りとはいかなかったものの、銚（もり）を使った漁でヒトデやウニ、ナマコ、そしてウミウシ（アメフラシ）をゲット。「相談に乗ってくれた漁師さんがいろんな人に電話で聞いてくれたり、とても優しく嬉しかった。これから自分も何かを尋ねられたらこのような対応をしたいと思いました」（島外女子中学生）



指令遂行を通じて島民との交流を楽しんだ参加者たちは、さまざまな発見や初体験をそれぞれ日記に記し、心に刻みます。そしていよいよ明日は、リアルな島の暮らしを味わうホームステイ。

否が応にも期待は高まります。



3日目 < 3月28日(日) >

6:00	朝食づくり	
6:00	起床	焼火神社
6:30	水汲み・出発準備	
7:00	朝食・片付け	
7:30	社務所の掃除	
8:30	焼火神社発	
	別府港着、船で移動 西ノ島組は移動	
10:30	ホームステイ先へ移動 (二人組)	
終日	ホームステイ先で過ごす 焼火神社の片付け	ホームステイ
	コネクター・ミーティング	

朝食

7:00、焼火神社での最後の食事が始まりました。塩鯖（水煮）、煮豆、ジンバの酢みそ和えなどが並んだ「焼火御膳」。「特殊なものは何もありません。でもこんな質素でも、昔からハレの日に食べてきたものなんですよ」（焼火神社の宮司さん）。この朝はコネクターも全員一緒に食事の輪に入り、もてなす側ともてなされる側が一つに。ヤカンのような鍋で味噌汁のおかわりをついで回る島のお母さんが場を盛り上げ、楽しい食事となりました。



焼火での2日間、みんなの心をつないだものとして大きな役割を果たしたのが、囲炉裏です。寒ければ寒いほどに増す、温かい囲炉裏の引力。いま頑張っていることを教えあったり、今後の進路ややりたい仕事、思い描いている夢を語ったり。中学生、高校生、そしてスタッフ支援で参加している大学生も加わり、年齢を超えてポジティブな刺激を交わしあったひとは、彼らにとって間違いなく価値あるものになったはずです。



「観光学科？ 面白そう！」

「私、また観光甲子園にチャレンジしようと思うんだ。今の経験を生かして大学も選びたい」



「もう島根弁になっている～！」

「だけん、だけんってつけるのがポイントなんだよ」

焼火神社の掃除

そしていよいよ下山。大広間や炊事場、洗面所などに心からのお礼をこめて、みんなで掃除をしました。火鉢が無いと過ごせないほど寒くて、水が乏しく広いお風呂も無い、布団も薄くて硬くて...そんな過酷な状況の中、互いの絆を深めながら笑顔で楽しく乗り切った焼火。

「すごく寒かったけど... ありがとう、焼火の神様」

ホームステイ

「普段と違う生活の中で自分を再発見し、もうひとつのふるさと、そしてもうひとつの家族を作ってください！」（高校生スタッフ）

プランの目玉企画のひとつ、ペアに分かれてのホームステイが始まりました。

「大脇と言います。あっつぁと呼んでくれ」

くん&Tくんペアのステイ先は、海士町のブランド岩がき「春香」を手がける海士いわがき生産株式会社の代表取締役である さんのもとで、岩がきの出荷作業なども体験しました。



大らかな さん夫妻と、なりたい職業の話をする二人。お菓子作りが得意な くんはこの夜、クッキーを手作りしてプレゼントしました。

同じく海士町で、ステイ先の さんの手ほどきを受けながら初めての釣りにチャレンジしたのはTくん。「昔は地下（じげ）中で海に潜ってサザエを獲ったもんだよ」。「へえ〜！」。釣り名人もよく来るという穴場で、Tくん人生最初の釣果は...、ぼっか（かさご）の子ども！



HさんとTさんは海士町内のKさん宅にお泊り。牛舎で牛のエサやりを初体験しました。また、「ワカメを自分で海に採りにいってその日の夕飯で食べるなんて初めてでした！」（廣瀬さん）と、自給自足の食生活に新鮮な感動を覚えた様子でした。



4日目 < 3月29日(月) >

午 前	一宿一飯のお礼	ホームステイ先
	船等で移動	
12:30	寮へ集合・昼食	高校 調理室
13:00	郷土料理教室	
15:30	だんだんパーティーの準備	鏡浦寮
17:45	港への迎え	菱浦港
18:30	だんだんパーティーの開始	鏡浦寮
21:00	片付け	鏡浦寮 食堂
	港まで送り	
21:00	風呂	
22:00	就寝	
	コネクター・ミーティング	

郷土料理教室

最後の夜が近づいてきました。今宵はいよいよ、お世話になったホストファミリーや島前の人たちにお礼の気持ちを伝える『だんだんパーティー』。島の食材を使った料理を自分たちの手で作っておもてなしをするため、給食センターの澤井和行さんを講師に招いて郷土料理教室が始まりました。みんなが挑戦するのは、「アジの刺身」と「メバルの煮付け」です。



だんだんパーティー

だんだんパーティーの会場は、島前高の学生寮「鏡浦寮」の食堂です。完成した料理をセッティングし、梅の花を飾って、招待客の皆さんを出迎えます。

だんだんパーティー

18:00、宴がはじまり。島の家族 ホストファミリーの皆さんと一緒にテーブルを囲みます。

「このお刺身と煮付けは参加者みんなで作りました！ 美味しいので是非！」（高校スタッフ）

食卓には刺身や煮魚の他、八バの炊き込みご飯で作ったおにぎりやジンバの天ぷらなど、島前ならではの島グルメが並びました。なんとウミウシ（アメフラシ）を西ノ島特産のなめみそと山椒で和えた珍料理も登場。



心尽くしの島グルメを一通り堪能した後、みんなで撮った写真をもとに作ったスライドショーを大画面で見ながら、これまでの旅を振り返りました。

その後、参加者からは、

「東京と比べてここの自然や人間的な魅力が全然違うと思った。おじいちゃんやおばあちゃん達の僕らを受け入れてくれる感じがすごく嬉しかった」（島外男子高校生）

「色んな初体験をした。民泊で世話になった陶芸家の加藤さんに、お皿も自分で作ると視点が変わるということを教わった。この体験を糧に帰っても頑張りたい」（島外男子高校生）

「地域の人たちみんなが自分たちの島のことを大好きで、その良さを一生懸命私に伝えようとしているところが良かった。人が温かいところだったと家族に伝えたい」（島外女子高校生）

「食べ物に感動した。自給自足ってのがすごい」（島外男子高校生）

「明日帰るのが嫌！ 夏に必ずまた来ます」（島外女子高校生）

「山や夕日、海、その景色のよさを見ているだけで目に涙がたまってくるほど感動し、勇気や希望をもらえた。隠岐は何か特別な力をもっているんじゃないかと思う。感動をいただいた分、この経験を土台に、自分の夢に向かって頑張っていきたい。ありがとう」。
（島外女子高校生）

「朝6時に牧場に行ったときすごく寒くて、牛の世話の大変さを感じた。普段食べているお肉の裏にある努力はすごいことだと思い知った。滞在中に強く感じたのは、島前では当たり前のように存在している温かさと人どうしの繋がりの強さ。これを実感したからこそ、東京に戻って伝えたい。ヒトツナギの旅を多くの人に体験してほしい」（島外女子高校生）

といった、時間のこもったコメントが次々に述べられました。



ステイ先の 島のお母さん の温かさに思わず涙があふれる参加者

「ヒトツナギ」体験を経て大きな成長を遂げたのは、ツアー参加者だけではありません。昨年の「観光甲子園」から現在までずっと関わり続けてきた元祖メンバー、高校生スタッフが「（いま無事にパーティーをできていることが）これは夢か幻か…。日々、我々も進化し続けてきたのだとしみじみ感じています」と語ったように、コネクターたちもまた多くのことを学びました。

旅の前日の夜まで、「どうやって参加者を交流させる！？もっとアイディアを出せ！」「そんな台本じゃ駄目、練り直し！」などと侃々諤々の議論を重ねてきた8人。結局準備が間に合わず見切り発車となったばかりか、ツアー中も頻発する予想外のトラブルやアクシデント。それでも、参加者にとって最高の旅をプロデュースするために必死で考え、工夫し、試行錯誤して難局を乗り切りました。

「みんなに感謝。でも一番感謝したいのは参加してくれた中高生の皆さん」（高校生スタッフ料理担当）

「当日まで不安だったけど… いま、みんなの笑顔が嬉しい」（高校生スタッフ）

「ヒトツナギ」に関わった全員が成長したと同時に、確かな「つながり」が生まれたことを、このだんだんパーティーで各人が改めて実感できたようです。

パーティーのシメは、島前高のハッピーでキメてキンチャモニャ。軽快なリズムでしゃもじを打ち鳴らし、ひとつの輪になって踊りました。

「これが踊ればみんな島の人だよ！」



初日の歓芸会でのレッスンの成果が、キンチャモニャの振り付けはバッチリ



「もうすっかり海士っ子の顔だ！次は家族でおいで」



高校生スタッフが作ったオリジナルTシャツを全員に配布。

「ヒトツナギ」の仲間の証！

5日目 < 3月30日(火) >

5 : 1 5	起床	鏡浦寮
5 : 3 0	出発	
6 : 0 0	起床・朝食・お弁当づくり開始	
6 : 3 0	朝日を見る	崎
7 : 3 0	朝食・片付け	鏡浦寮 食堂
8 : 0 0	寮清掃	
9 : 0 0	移動	キンチャモニャセンター
	お別れセレモニー	
9 : 5 0	フェリー発・見送り	
1 0 : 0 0	島前の参加者解散	

朝日見学

翌朝5時半、まだ眠気の覚めないみんなを乗せたスクールバスが鏡浦寮を出発しました。向かうは南端、崎地区。島の夜明けを見るためです。

黄金色に輝く朝日に出会えた瞬間、絶句。「すごい…。こんな朝日、見たことなかった。」



寮に戻って最後の朝食を済ませた後は、記念のビデオ撮影です。みんなと出会えた喜びが爆発、笑顔が弾けます！ でも、別れのときはもうすぐ…。



別れのセレモニー

島外参加者を本土へと運ぶフェリーは9：50出航です。残された時間、菱浦港の広場で別れを惜しむ参加者たち。手作りのお弁当は嬉しいけれど、みんなと別れる寂しさは隠せません。



「ヒトツナギ」の旅で彼らが見て、聞いて感じ取ったのは、島ならではの素晴らしき日常。人と人とのつながりそのもの。島前の良さを発見し出会いに感謝し、人と自然からパワーをもらってそれぞれの故郷へ帰ります。お土産は絆。参加者の中には、本音で語れる一生の仲間を得た人もいるかもしれません。



「島前を第二のふるさとだと思って！」 「いつでも戻ってきいいんだよ！」





4 . 旅の思い出の本の作成

旅の写真や日記、料理レシピなどが書かれた本を作成し、参加者にプレゼントする。この本を見ながら、旅を振り返ることで、島前を思い出してもらい、もう一度旅に参加するきっかけにしよう。



【 作成方法 】

ヒトツナギの旅の1日目にスケッチブックを参加者に配布する。
スケッチブックは、旅のしおり、日記帳として使用する。

【 内 容 】

参加者が書いた旅の日記
旅の写真集
旅で食べたレシピ集
旅の写真集ペアへの手紙

5 . 振り返り

地域の人たちの感想

高校生スタッフの考えを聞いて良かった。
高校生スタッフが、自分を頼ってきてくれたことが良かった。
焼火神社で宿泊してよかった。
ホームステイの日にちはもっと長いほうが良い。

高校生スタッフの感想

一生懸命にがんばれたことが良かった。
達成感を味わえた。
自分が成長できた。
ペアは、徐々にうまくいった。
高校生スタッフの組織体制をしっかり作ったほうがよい。
もっと早くがんばればよかった。

大人のスタッフの感想

よかった点

西ノ島、知夫と自分が繋がれて、島前でよかったと思えた。
大学生のサポーターがいてよかった。
生徒一人一人の成長が見られる旅であったと思う。
生徒が全体総括をしていたことは良かった。

改善点

保護者への説明会をできたらよかった。
サポーターがもっと必要だった。
生徒と大人が行うことのラインを引くことが必要であった。生徒がすべきこと、大人がすべきことの見極めをする必要性がある。
プロセスを大事にしつつ、自分に自信の持てることを引き出す。
大人が全体感を持って進めていくこと。
部外者を救急対応にするのは避けた方がよい。
何か起こってしまった時のマニュアルがあるべき。(個々の対応による状況)
携帯電話が繋がらなかった。

5 . まとめ

「ヒトツナギ」を開催することで、高校生スタッフだけでなく、旅に参加した中高生、地域住民の方々、支援スタッフ全員が、新しい発見をすることができ、成長することが出来ました。高校生スタッフは、準備する中で、自分に出来ること、まだ自分だけでは出来ないことを体感しました。しかし、まだ出来ないことは、地域の人に悩んでいること、協力してほしいことを素直に聞くことで、どんどん解決していくことも体感することもできました。そのことは、高校生スタッフが、地域の大人の底力を知る機会になり、また、尊敬する機会になりました。地域の人にお礼周りに行っているとき、高校生スタッフの一人が、自分のお母さんに「初めて自分の母さんが、このキャラクターでよかったって思った」と伝えていました。自分の親への感謝の気持ちや、尊敬する気持ちを自然と感じていました。

また、島前地域が子どもたちのためにひとつになり、これから島前高校が活動する基盤づくりのきっかけにもなりました。地域の人からは、「ぜひ、ヒトツナギは続けてもらいたい」「島前高で何かするときには、協力したい」という言葉をいただきました。これから、島前高校が地域創造コースで、地域中で学習をすすめていきます。ヒトツナギの活動で、地域住民の協力が得やすくなったと思います。

ヒトツナギは、島前地域に住む人たち、全国の人たちにとって、続けていくことに意味がある旅だと分かりました。

平成 22 年 3 月 31 日
「島前ヒトツナギ」チーム
隠岐島前高等学校魅力化推進協議会